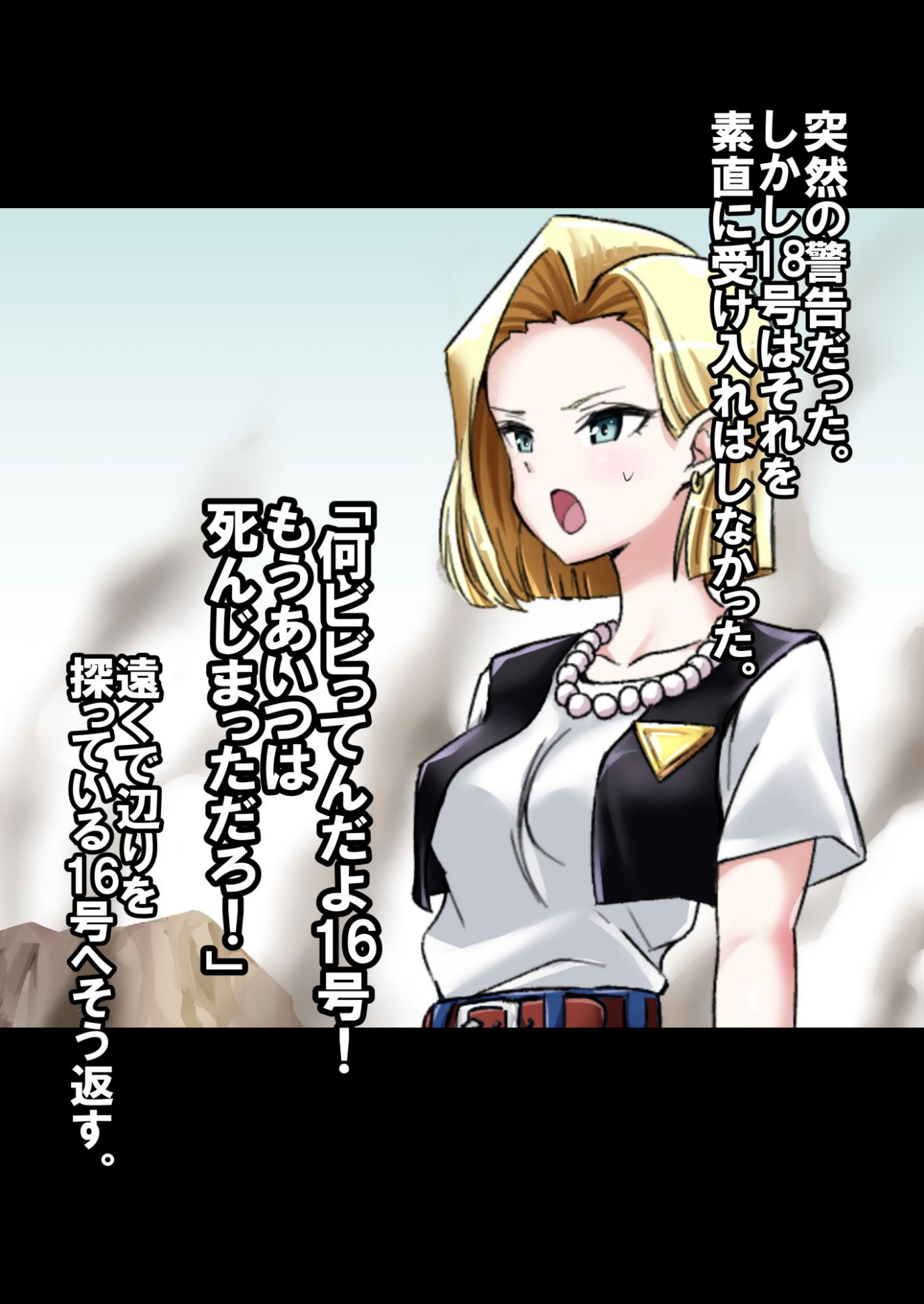
「すごい……!」
ゴゴゴゴ…
18号は16号の実力に心から驚いていた。
16号がセルに放ったエネルギーは凄まじく、地表に数えきれない数の大穴を作る程だった。

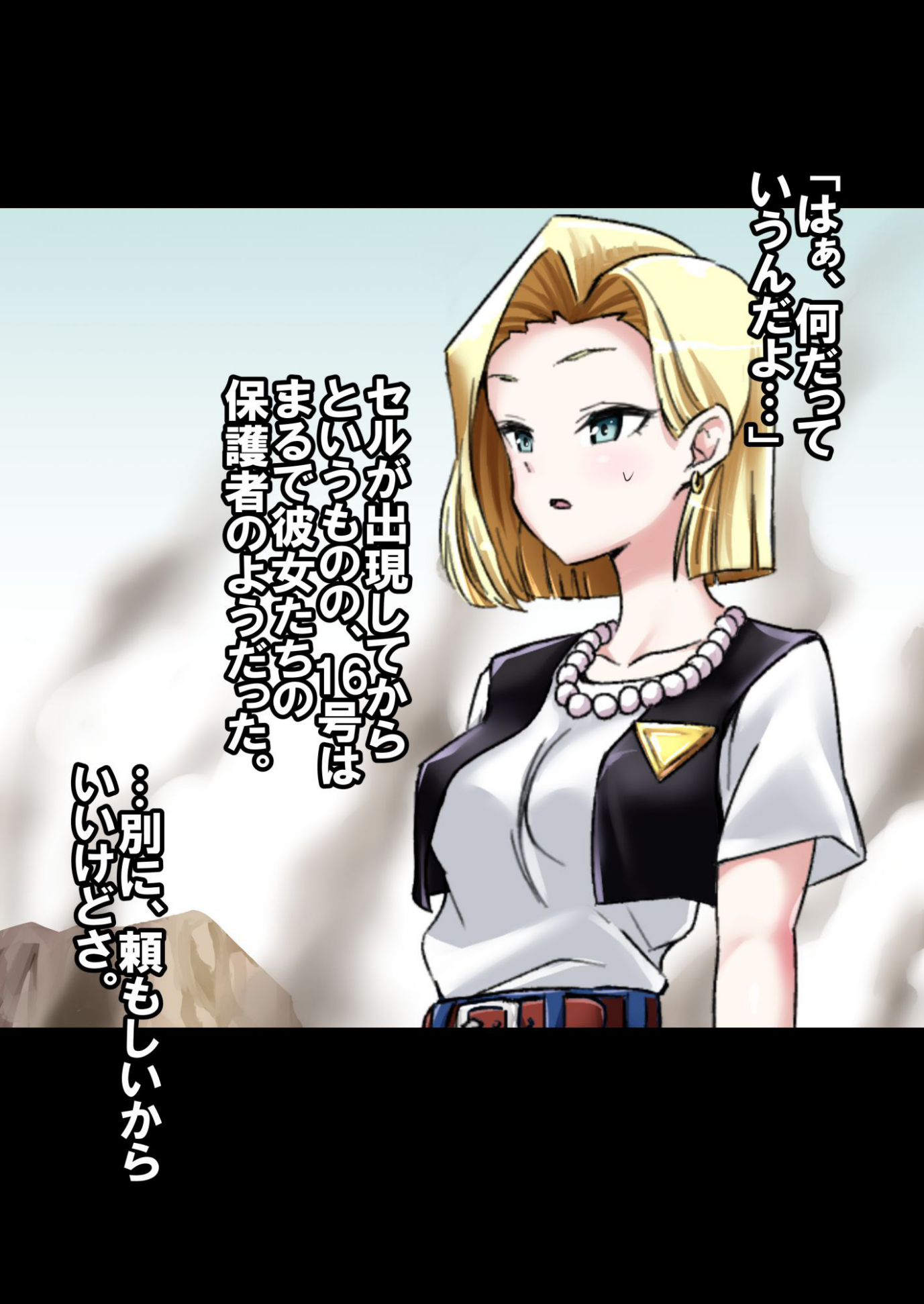
この攻撃なら
万に一つもあの化け物は
生きてはいないだろう。

だが、当の16号の見立ては
彼女とは違っていた。

「まだ逃げていなかったのか18号!!
早く逃げるんだ!!」


突然の警告だった。
しかし18号はそれを
素直に受け入れはしなかった。
「何ビビってんだよ16号！
もうあいつは
死んじまっただろ！」
遠くで辺りを
探っている16号へそう返す。

「奴はダメージを負っただけだ!!」
「お前も狙われていることを忘れるな!! いいから早く逃げろ!!」
16号は本気で怒っているようだった。


「はぁ、何だって
いうんだよ…」
セルが出現してから
というものの、16号は
まるで彼女たちの
保護者のようだった。
…別に、頼もしいから
いいけどさ。

一方、散々セルに殴られていた
17号は、奴が生きているという
16号の言葉にこれ幸いと
血気盛んに辺りを探っている。

仕返しを考える気持ちは
よくわかるが、18号としては
そもそもあんな
化け物の身体に
触れること自体が嫌だった。

ぬらぬらと照かった
甲羅に、セミのような羽。

何かの疫病の様に、全身に
大量に浮かび上がった斑模様。
そんな化け物が、自分たちを
吸収しようと迫ってきたのだ。

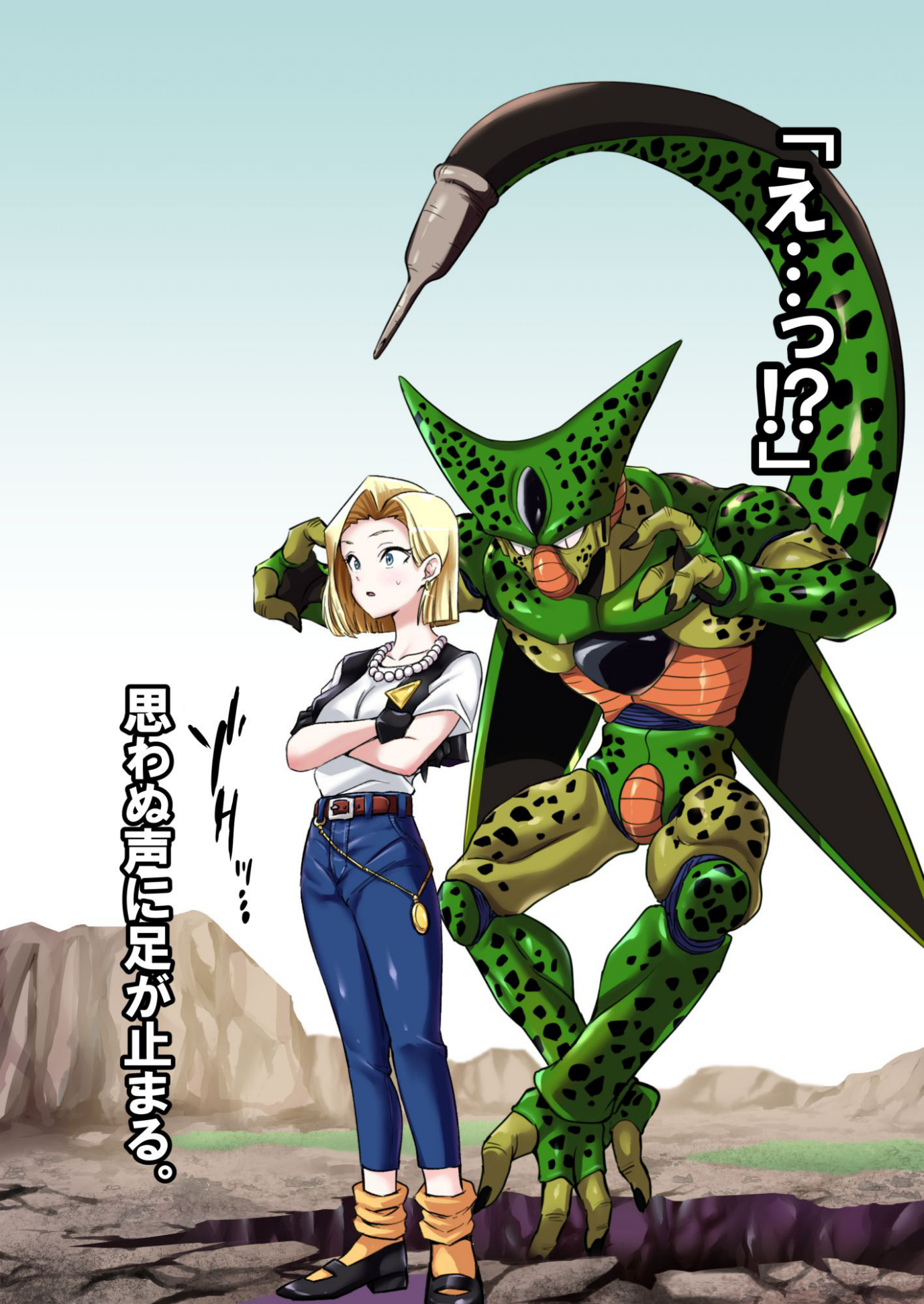
「18号、ささまもすぐにいただくからな！」
ぶるっ…
セルにそう言われたことを思い出して、18号は思わず身震いする。

冗談じゃない。
なんであんな化け物に吸収されなきゃならないんだ。

でも、もう何も
心配することなんてない。
だって奴は死んだんだから。

これ以上16号の機嫌を
損ねるのもよくないだろう。
今日はもう
お開きだね、と18号が
歩き出したそのときだった。

「18号!!」
「後ろにセルが!!」


『え…っ!?』
ゾクッ…
思わぬ声に足が止まる。

ゲォン
そんなバカな。
18号が慌てて振り向いた
ときにはもう遅かった。

ズ
「うわあぁぁぁっ!?」
ズ

ガッ
漏斗状に拡大した
セルの尻尾が
18号の上半身に
思い切り喰らいついた。
「ふはは…
油断したな18号…!!」
ビクッ
ビクッ
『うぁっ…く…!!』

18号は身を捩って尻尾から
脱出しようと
もがいたが、尻尾の口は
吸盤のようにぴったりと
貼りついて離れない。
ぶよぶよとした
柔らかそうな
見た目に反して、
それは強靭な力で
18号の身体を
押さえつけていた。
ビクッ
ビクッ

ムンァァ…
べっとりとした粘液にまみれた尻尾の中は異様な臭気と熱気に包まれており、サウナのようだった。
ミュブブ…
ズザッ
捕らえられた18号の身体は宙に持ち上げられ、もがいた足がむなしく空を切る。

ムムァァ…
「何だよこれ…
気持ち悪い!!放せぇっ!!」
口では悪態をつきつつも、
本当に自分が吸収されて
しまうかもしれない事態に
冷や汗が噴き出す。
ミュブブ…
ズザッ
それが尾の
粘液と合わさって、
シャツが不快な
湿り気を帯びていく。

「安心しろ18号…
完全に吸収するのは
まだ後にしてやる」
…何だって!?

意外な言葉に困惑する
18号を他所に、セルは18号を
捕らえたまま
自身が出てきた穴へと姿を消えた。
ヒュッ

理由はわからないが、
セルはどこかに
移動しているようだ。

一思いに自分を
吸収しようとしないのは、
16号に邪魔されるのを
恐れてのことだろうか。

くそ…
こんなことになるなんて…

ズバッ
ブルルル

『あうっ……っ!?』
どさっ
セルの尻尾が口を広げ、やっと18号を解放した。

辺りは巨大な岩が無数にあるだけの殺風景な荒野だった。
そして、18号の目の前には当然だがセルが立っていた。
さっきまで18号を包み込んでいた尻尾は、いつの間にか元の針状に戻っていた。

「私を吸収するんじゃなかったのか…!?」
18号はセルを睨みつけて言った。
だがセルは何も答えず、じっと彼女を見つめている。

それは実に不気味な静寂だった。
既に拘束は解かれていたにも
関わらず、縛られたように
その場から動けなかった。
「……何見てるんだよ!?」
そう言ってすぐに、
あることに気づいた。

――全身を見られていた。
セルは視線を何度も、何度も、
舐めるように足元から
太腿、胸、顔へと走らせていた。

目をじっとりと細めながら、
まるで商品を品定めするかのように。
寒気がした。
18号が抑えきれない不快感を
吐き出そうとした瞬間、
セルが再び尻尾を
彼女の身体へと伸ばしてきた。

「ひっ…!!」
今度こそ、吸収される。
それが恐ろしくて
反射的に声が出る。